銀鈴第十二號（每月[illegible]回二十日發行）
明治卅七年一月十四日第三種郵便物認可　明治三十九年四月廿五日發行

銀鈴

第拾貳號

銀鈴第拾貳號掲載目次

禁轉載

漁夫（長詩）……しちせい
春圃雜筆（雜文）……千代延春圃
みつしほ（短詩）……磯守の三郎 磯の乙女
殘燭（短詩）……菅原紅雨
雛十五句（俳句）……神の子
眞木柱（短詩）……社友咏言
短歌輪講（批評）……
みだれ花（短詩）……支部咏草
短歌小評（批評）……竹林坊左一
湖音會（俳句）……
うすあを衣（短詩）……大屋左一
寄贈新刊……
俳句……洲琴 洋月
廣告……
控帳（雜文）……

漁夫

しちせい

日の入る西よ、三人の漁夫は婦を岸に捨てぬ。
日ごろいともかなしき海幸、
父によるもののみぞ多なるに。
たとひ、浮の洲涙の穂騒ぐとも、

銀鈴第拾貳號
明治三十九年四月二十五日發行

またこは、町はづれ子に送られつ。
『すすむは男の子、地の上は、
女は涙につくられぬ。』

闇あんたんの燈臺に、
婦は灯を目路に置きぬ。
氷雨、颶風、異形なる
夜の雲はいと悽惨に。
いま洲の瀬は涙に悲鳴するも、
あらしは疾く、水隔つれば。
『すすむは男の子、地の上は、
女は涙につくられぬ。』

朝の日砂に明けし時、
潮は死躰をれきて往にぬ。
泣くも恨むもあかなはむや。
今はかへらぬ人のために、
休んぬ、いざつとめ終へて、
白泡たつ瀬を捨てむ、早く
『すすむは男の子、地の上は、
女は涙につくられぬ。』

——(キングスレー)——

春囿雑筆（一）

千代延春圃

▲婦人を稱して御樣といふ事

上流社會の家庭に於ける婦人を稱して、御樣、ゴウサマ、オゴウサマといひ、土地によりては、れ松ごゝ、れ梅ごこ、お竹ごこといひて、以下なるは何御と稱するもあり。ごとは如何なる文字をや當つると思ひ居けるか、能因法師が結び松を見て、こゝは伊勢の御の故跡なりといはれしより、伊勢の由緒を尋ぬるに、伊勢守繼陰の女にして仁和の頃宮仕へに出で後に亭子院（宇多天皇）の皇子桂宮（行明親王）を奉られし故、尊びて、伊勢の御息所と稱し、伊勢の御ともいへり、となり、されば御は女の尊稱にして唯人に用うべき言葉にはあらざりけり。彼の荻生徂徠か南留別志の中に『御とは女の稱なり、狂言に、鬼のむすめをよびてれごうといふ、今も奥州にていふなり』云々といへるは、まだ盡さゞるなり、而してこは五文字樣より出つらむと通俗にはいへど、こは謬にて中古に於ける婦人の敬稱を御といへるは前例にても明かなり、即ち御樣のごを長呼音になしたるにて五文字樣などは理屈に偏したる論といふ可きなり、この御に就いては尚伊勢貞丈は安齋隨筆に百尺竿頭一歩を進めて論じたり、曰く

女の詞に他の女子を敬ひて、五文字と稱する事、后宮名目抄に貞清美譜胎の五文字を備へたる事をいふと見ゑたり○貞丈按ずるに、女子の詞に、漢土の古語などを用ゐていふ事は、あるまじきなり、按ずるに本朝文粹第一菅公の詩に開卷稱辨御（自註に）俗謂二貴女一爲一御、蓋取二女御之儀一也とあり。是によれば、五文字の五は借音にて、實は御文字なり、御は女の貴稱なり、又皇后名目稱に信西法師の娘の辨の局の上西門院の命婦方へ送れる歌に『人ニイツィッヽノ文字ノアトキエテ俤サヘモカキクモリヌル』といふを證に引きたれども、歌の始めに、人といへるは、廣く男女をさしていふ、女のみに限るまじ、いつゝの文字といへるは仁義禮智信をいふなるべし。歌の始に人といはずしてたをやめの杯といひ出したらばいつゝの文字といふは貞清美譜胎の事とも聞ゆべし云々

右の諸說にて判然するに似たり。日向にてはれ松ごゝ

お竹どゝ下りてはさん、どんとなり薩摩にては我より目上なる家の女をでさまといひ、肥前島原あたりにては上をお鶴様、お亀様とやうにいひて、下をお鍋ど、お釜どとやうにいふなり。奥州地方にては娘をさし、防長近介にては、嫁をさしていふ。而して日州あたりにては人の息子を敬稱してワコサマといへり、ワコは今昔物語などに從者共が主人の子を稱して、若子といへることあるを見れば、中古はかくいへりしと思ゆ、されぱこれより轉じたるなるべし。

▲短歌募集

△課題

戀ならず、遠く袂を分ちにける男(女)に代りて

△本社編輯局選

△投稿注意

一一人十首以下
一用紙は半紙
一締切五月十五日
一發表本誌第十四號
一秀逸三名に本誌一部づゝを呈す
一銀鈴社編輯局あてのこと

みつしは

磯守の三郎

磯の乙女

潮鳴りや鷗舞ふみてみなぞこの迷宮戀ひし貝にならばや　(乙)(三)

魚ねむる玉藻のうへの春の月白鳥の背にうすあかりして　(三)(乙)

椿の戸もらぐ鬢香のよき君にまろうど來しと告げぬうぐひす　(乙)(三)

みつしはに二人がさよき戀凝りぬ眞珠かがやく花珊瑚かげ　(三)(乙)

八瀬の女も交りぬ花の大原や比枝の法師も三五の人も　(乙)(三)

連歌すと今宵公達貝鞍の駒して來たり連翹の宿　(乙)

花笠や鳳凰縫ひし玉簾のみくるまきしる西嵯峨の里　(三)(乙)

ねもわかぬ鳥の聲しぬ木がくれに君と別るる夜のさびしさよ　(三)(乙)

夜な夜なを龍女まゐりて灯すと翁かたりぬ島のみやしろ　(三)(乙)

鳳凰の彩のしだり尾なよびかに相思の人を卷きにけるかな　(乙)(三)

あけぼのや夢のなかなる人しひて三瓶をめでぬならびて欄に　(乙)(三)

潮どよみ魔女が月よぶさびしみと闇はせまりぬ頬をよせたまへ　(三)(乙)

殘燭

菅原紅雨

うらぶれてさびし運命に泣く人の涙こりてや星と懸れる

幾度か捨てぬよき歌成らざればみ文かたしきなきぬを思へ

眞闇にもそれと小窓の灯のごとくれぼろに胸に君を點じぬ

殘燭や淡きれもひの春なればいかに遠びとみ歌れてさせ

きぬぎぬの君やなはある見かへれば花散るかげよ立てり朧に

本社同人千代延松灣は號を春圃と改めたり

雛十五句

神の子

雛棚や桃を生けたる大廣間
雛の鏡小さき灯に光り鳧
そよ風に雛のかざしの搖き鳧
古雛の笏も冠もなかり鳧
雛棚の小琴に散りぬ桃の花
金屏に灯更けけり雛まつり
雛まつりありし昔の忍ばるゝ
練絹を十二一重の雛かな
御佩刀をさゝせ參らす雛かな
男雛女雛睦しさうにたはし鳧
帶刀を拔かんとする雛かな
古雛の苦もなく落つる御手かな
灯にそむく雛の頰のほてりかな
雛祭憐の老もまねきけり
束帶もゆゝしう見ねぬ古雛

眞木柱

千代延春圃

臚夜や梨地すりたる文箱もちて稚子髫禿の柳を出づる
二人が名星のみ國に花と咲けと羽に記して鳩放ちやる
歌筆にさびしき戀もうつさばや梅ちる道の臚夜にして
池にさくむらさき藤よ口籠りの戀つつましき乙女のやうに

立石洲洋

初午や白髮のをぢとともなひて君は辿りぬ九段の坂を
南山は遠はの見ねて紫の雲ながれけり春のあけぼの

藤本晩花

春風は紅梅に吹き鶯のよき音に吹きぬ南よりして
永久に花咲かしむる常樂の世界と知りぬ歌あ

▲六

る人を
白梅の香しぬみ手卷く片時よかたみに胸の馥郁たれば

中津峰秋

延曆の事みなふりし洛中や殿上人のくるまきしりぬ
洛東や不夜の街々櫻さくながめと云ひぬ京の子なれば
羽子板の似顏ほめたるよき人は添乳するなり春の雨かな

坂本笑風

春雨や海氣ねぼろに立ちこむる珊瑚の島の雌雄の葦鹿よ
ひんがしや櫻の丘に皷して歐洲ぶりの藥師もありぬ

竹林坊

れのづから生ひし両翅よ金蝶は花ちる里の人をめぐりぬ
紅のわが血を見ませみ名思ふかた時ながら涙こぼるも（人仁）

▲七

福間如舟

千行の涙し敢てぬぐはざれかくてみづから慰め得れば
蠟とけてこりたるごとき朝の湖風して立ちぬ小さき船かな
葉柳に淡煙こむる春雨やうつら病者のごとしと云ひぬ

山本明星

だくうたせ乘ると木馬にまたがれる若き美男に散るさくらかな
春雨や清涼殿の幕のふき天華くだると櫻ふぶきす
朝ぎりの中行く船によく似たる雲のうがひぬ交野の春よ

小笹琴風

人はあらず傾むく軒の片かげにさくら咲きけり日は紫に
みちしはや漕ぎいでにける三反の帆船にねむる思はれびとよ

木村秋浦

ぬかるみや灯なきに泣かれぬるわが世もかくとれもひてはなは
河添ひの里の三村は麥青う甦りにしかたちとれぼせ

河野翠激

彌生月さくらのかげに物ありと怖おしを思へ
君が十五に
戀するや思ふやただに慕へるや刹那のみ手もうたひぬれば
あゝ半夜春の雨するしめやかさ君を思ふに又なき時か
ひとたびは恨みぬさはれ一瞬によろこびみちぬ胸のそこより
敢て問ふ大惡日のわざはひのいたるも我をなほ思ひ得や
ゆゑしらずただに見てける瞬間に新柳のごと芽生ひけらしも
春雨に濡れてこし人いたはると束の間ながら母をそむきぬ

和歌輪講

明星午歳第四號（櫻花號）與謝野晶子女史作『從妹に代りて』

あはれなる胸よ十とせの中十日れもひ出づるに高く鳴るかな

△末摘花曰。『十とせの中十日』は連續したる十日に非ずして某年某日某年某日の追懷と見て可いでせう。

△又　曰。『おもひ出づる』とは何の事實があるでせうか。

△木精曰。意味する事實は問ふ所でない。而して非常に同情を惹く歌です。

△素瓦曰。『中十日』は連續したるものか否かは疑問ではないですか。

△木精曰。疑問ではないやうです。

うき髪はかぶろに切りて紫に生ふる小草とまぎれ居ぬべき

△末摘花曰。『紫に生ふる小草』は髪を形容せるもので誠に美くしい語だと思ひます。

△木精曰。同感、これは自から憂愁を脱して、美くしい境に入らうといふ憧憬とも見られるでせう。

△素瓦曰。『まぎれ居ぬべき』のまぎれは輕く解したいものです。

△末摘花曰。同感です。

あゝ少女なにを憎めとつくられし戀しき人をうらむが上に

△素瓦曰。いゝ歌です、歡興盡くるを知らず底の佳調だと思ひます。

△末摘花曰。辞句は疑問も何もないやうです、快よい歌です。

△木精曰。左程いゝ歌とも思ひません、が兎に角少女の情の纏綿たる所は現はれて居ます。

兒を見れば日刺すと白き虹の射るそらに時雨の雲わくおもひ

△末摘花曰。この歌を解釋するには兎角理屈が混じ來るやうです。餘りいゝ歌とは思はぬ。

△木精曰。びどく理屈を以て解釋せぬがいゝではありませんか、愛兒に接すると光明とか闇黑とかまあ種々の感想が浮び來るといふやうに解したいものです。

△素瓦曰。同感です。

△末摘花曰。どうも解釋があまりコジツケた樣です。私は畢竟理屈を放れて解せられぬ歌と思ふ。

△素瓦曰。比喩は頗ふる突飛に失して居ると思はれるやうです。

君ならぎいくたびすなる變心のわれを憎まむ愛よのろひよ

△末摘花曰。わがいくたびか變心するを君は未だ知り給はず憎み給はぬに愛とのろひは彌々と我に逼りて我をさいなめりと云ふ意味でせう。『愛』と『のろひ』は爰に擬人せられたものゝ如く思はれます。

△木精曰。同感。

△素瓦曰。同感。

あひ初めし日かやわかれの涙かや泣けば似るかな心なごみて

△木精曰。『あひ初めし日』と『わかれの涙』とは其泣くによりて慰め得るとの相似たるを歌つた物でせう。

△末摘花曰。『泣けば似るかな心なごみて』と轉置法を用ゐたのは巧妙なものです。川上櫻翠氏の歌にでもありさうな作だ。

△素瓦曰。平易な題材を平凡にせしめなかつたのは、

作者の技巧です。

わがかがみたわつくらせし手枕をゆめみるら
しき髪うつるかな

△木精曰。わが髪を鏡にうつす時の聯想で、ツマリいつか君と添寢の手枕かし給ひし時、たわを生せし過去の追想の、夢見心地に浮び來る有樣を歌つた意味だらうと思ひます。床しい歌ではありませんか。

△末摘花曰。解釋は間然する所がありません、非常に興味を覺ゆる歌です。

△素瓦曰。この歌には別に意味がない、頗ぶる老巧な作だと思ひます。

十とせとは見しや戀しや失せにしやうき瞬間
のかさなりを云ふ

△素瓦曰。十年といふと永いやうだが、初めて逢つた人、その人を戀しと思つたと、その戀も失しなつて了つたといふ、こんな瞬間が重なり合つて、早くも經て來たと。此う解したいと思ひます。『うき』は過去が遂に失敗に終つた悲觀的な語として用ゐた物でせう。

△末摘花曰。解釋に於て加ふる所がありません。

△木精曰。『十とせ』といふのが極く引き締つた適當した佳い句だと思ひます。

思はるゝわれとはなしに故もなうむつまじか
りし日もありしかな

△末摘花曰。戀はるゝとにはあらず、唯睦まじく物語りもし、時の詩界をも話し合つた時もあつた。然し今では相戀の身の上だと斯ういふ歌で、奇もなく變化もない單調なものだ。

△木精曰。同感、あつさりした歌です

母と伯母夜は涙のながるゝと見しりがほする
ちひさき人よ

△木精曰。此歌は、母と伯母とが夜には涙流したまふとちひさき人が見しりがほをするといふ意をうたつた物だと思ひます。『夜は涙のながるゝ』といふとには同情を表しますが、餘りよい歌とは思はれません。

△末摘花曰。同感。

△素瓦曰。印象が不明瞭な樣なが感します。

やごとなき常精進のひじりさび五尺ばかりの
黑髪の人

△末摘花曰。黑髪の美し人が、精進のひじりのやうに悲觀的の境涯にはひつてゐるのを吊ふた歌で、或は何か寓意があるかもしれぬ。

△木精曰。『母と伯母』に比し數層の同情をよせます。

△末摘花又曰。前のよりいゝ歌とは思はぬ、いたいたしい、物さびしい、陰氣な歌です。

天上の善き日におとる日と知らずおんいつは
りの第一日を

△末摘花曰。『天上の善き日』とは歡樂つきぬ常春の日、『おんいつはりの第一日』とはいつはりの戀をゆるしたまふ日、この日を前の日の喜びに劣らぬ善き日、樂しき日と思つてをるといふので、われとわが輕卒を知らぬ女性の上を歌つた面白い歌だと思ひます。

△木精曰。『おんいつはりの第一日』を過去と見て、盡くる期なきうらみも見ゆるやうです。兎に角、わたくしも面白い歌だと思ひます。

△素瓦曰。同感。

前號所載の主なる誤植。七頁三行「さゝげる」は「さゝげむ」、八頁十行「小袖」は「小釉」、十一頁十四行「淵洋」は「洲洋」、十八行「われも」は「われと」、十三頁十五行「謹んで」は「讀んで」、十四頁十一行「つぬなき」は「つたなき」、十六頁十七行「僅」は「僕」、表紙裏六行「草苗」は「若草」の何れも誤りなりき。

みだればな

▲十一

一——濱田支部咏草

森脇桃村

隱沼の花藻の中によき人のまろね姿よ春の月さす

花姫に召されて風の走るらし羅の裾長うむらさきにして

河野素陽

春の日は今うつるらし綾なして金泥なして森にかゝりぬ

春の月おぼろに照りて榛の木はさながら立ちぬ巨人の形

松本掬雨

白蓮や池をめぐれる朝靄の凝りて化ぬらし水汲みをとめ

春月やうすら赤地のきぬまとひ花にまぎれて舞はむといひぬ

增野翅白

月姫は翡翠の玉の枝香爐に羅の袖ひきぬ九輪

▲十

の塔に
摺り裳ひき鼓うち舞ふ七乙女ならべるなか
に藤原の子も
『玉輿に召されてとつぐ雛よ』と相したまへ
り古井の尼の

二――松江支部咏草

舟木波秋

春の日や君とたづさへ陽炎のもゆる野あまた
往きかへりする

中津峰秋

口籠りて胸はおどりぬ頬はもゆ懸想の君よ
まのあたりして

三島溪雲

馬にして詩よむ春の大野原小鳥なく日を君は
歸りぬ

福間如舟

花かざし青野を行くに水緩う春光充ちぬ天
を仰ぐに

坂本笑風

朝な朝なうつむき姿なまめかし墓に詣でのう
ら若き人

立石洲洋

れもむろに地球はなるる雲なれば怪形をなし
て彩はなちける

短歌小評

△銀鈴第拾壹號に載せられたる短歌一つとして美しからぬはなけれどもわきてめでたきは、牧岡女史の『春の殿』かと存じ候實に詩趣津々として盡きず、百誦飽くを知らず候。其他素陽君の『春の雨』、くれなる中の『眼をとぢし』『大河内』『白薔薇』まためでたく、俳句にてすぐれたるは、湖音會俳句中の『餘寒かな』『梅を賣る』『陽炎や』等かとおぼえ候。（竹林坊）

△前號所載の短歌中、私が最もすぐれてうれしいと思つたのは、翠瀲氏の雨する日、春の水、われ生れて、知らぬ花、ねぼろ月、ふとさめぬ、そひぶしの。うぐひすの中の王城、宿緣、遠鳴、寒月、彩がめ。うつろ舟中のはれやか、川ぞひ、勿告藻中の奇しみ手、内裡雛中の臘月、桃さかば、みづはめ、春の海の數十首である。（左一）

▲十二

湖音會（出雲、乃木）

三月第二十三回例會を碧潭湖邊一清亭の階上に開く。運座、競吟、句合等例によつて頗ぶる盛なり。夜深更に及びて散ず（洲洋）

水温む門田をあさる家鴨哉　天泉
洗ひ菜の一葉流れて水温む　波秋
白桃や女易者が雨の宿　笛杖
廢院の畝石段や草萌ゆる　峰秋
沙山に舊師が宿や桃の花　如舟
閑吟徐歩濱の白布や水温む　笑風
莊周を胡蝶の原に夢みけり　洲洋
咲く桃の伏見の宿や鐘霞む
雪解けて水源近し信濃川

前號の本誌に募集せし俳句は選拔を得て次號に發表すべし。

▲十三

うすあを衣

大屋左一

二十五年妖と嗤笑ひし他人をわが影と見し驚きの日や

みむねなり、蠻双が國の醜俗と祖父がほこりの鎗は焚きしが

毒杯をふくみぬ鮮紅の血を吐きて蛇の呪咀を世にさけぶ夢

『憂愁』は黄葉の銀杏を七めぐり翅を伸して山こねてけり

『活動』は彩衣よそひ遠世より天馬の白に跑うたせ來し

涙の子に乳房ふくませ大海は眞夏日なかを眠

りにつきぬ

『歡樂』はつばさたたみて湖のほとり立ちぬ
と見たり白藤の散る宵

榾火たく煙の末ゆ笑みて立つうすゐを衣君に
似し人

『靜寂』の來てははぐくむ隱れ沼の夏の夕
のちさゞ波かな

れは海の天路はづれゆうすべにの衣して馳せ
來君が使か

七村を騎士の美少とうたはれむ一日あらばの
春の日の夢

いそがしう地獄をめぐる色旋のうしろにつゞ
くわが魂のかげ

▲十四

寄贈新刊

□しぶき（一ノ九）愛媛シブキ會出版部
引きつゞき青春の俳句資料の解釋を載せたりなかゝおもしろし。俳句また調へるもの〻如し。

□若櫻（二ノ三）下總文學會
短歌、とりたてていふほどのものはなけれども益奮發せられなば進歩の見込充分なり。

□野守（二ノ二）京都府此樂社
號を追うて改善の跡見ゆるはうれし

□文壇（三）能登北濤文學同窓會
とやかくといふほどの雜誌でもなし。大に内容の改善に力められんことを望む。

□衛生談話（六ノ三）東京通俗衛生茶話會

俳句

江南の柳江北の水温む　洲洋
そてはかと田螺ありくや水温む
雪解や紀伊濁流の水の音　琴月
冴かへる念珠の音や大がらん
打水の飛沫にぬるゝ詩集哉

俳句雜誌 **懸葵** 毎月一回 一日發行

●第三卷に入りたり此際購讀を始むるの好時期なり

第三卷第一號要目（三月既刊）

▲表紙畫（淺井默語）▲早春閑居（左千夫）▲第三卷に入るに當り（四明）▲漬餅（露石）▲春十題（青々）▲山中新年八題（露月）▲俳詣のデカデント、二（四明）▲病牀の句（雷死久）▲空也念佛（虛明）▲冬季雜詠（格堂、碧童、華園）▲春季雜詠（稻青、巨口、月兎、木皮）▲豚尾漢（快雨）▲俳反古（句佛）▲臼挽き（放逸樓）▲冬の尾張（聾兎）▲壁の記（蜩鳩）▲捕虜のクリスマス（木母）▲日句抄（鱸江）▲泥捧（木兎）▲募集俳句、雪（鳴球選）▲初午（四明、鱸江、秋蒼選）▲魚氷に上る（露月選）▲若草（句佛選）▲裏畫、俳人筆跡反古

◉定價一部金八錢、半ヶ年前金四拾五錢、一ヶ年前金九拾錢

京都市下京區松原通岩上西入北門前町
懸葵發行所

文學雜誌 **若草**

隔月壹回

●表紙華麗内容豐富紙質善良●

（本誌寄稿家）

渡邊光風　藏田信子　河野翠瀛
前田林外　奥原碧雲　竹村秋竹
小林吟月　廣江八重櫻　福島菊村
青戸白紅　奈倉梧月　西村東洋
錦織皷水　高城七星　筒井蕚坡
河井咀華　能海紫星　須藤寒泉
木村蕚塘　大屋桂水　野々村雲外

（其他數十名）

毎定會月價員
三郵半年
十稅分
頁共用
以拾前錢
上錢紙

十日發行

●來!!文學同好の士は速に來!!!●

出雲國大東町一七四四
わかや草會

銀鈴第十二號（毎月一回二十日發行）
明治卅七年一月十四日第三種郵便物認可　明治三十九年四月廿五日發行

控の帳

▲『早稲田文學』の論文は號を逐ふて振はなくなる金子筑水の『藝術の價値』も期待したほどのものでなかつた

▲然し其彙報欄は遺がと點頭かれもする間々獨斷の弊に陷るのは蓋し此種の評論に免がれぬ所かも知れない

▲『明星』所載の美文譯文――文科大學生の――は時に甚だ殺風景なものがある『帝國文學』にでも載せたい

▲前號『銀鈴』のさきくさは誰かと本社に問ふて來るものがある歌を讀んだら大概知れさうなことだと思ふ

▲社友立石洲洋君の歌は奔放な處があつて嬉しいが今少し推敲して戴きたい措辞の上に力を入れたら何うだ

▲本社に寄贈せられる新刊のうち俳句の最もいゝのがクヂラだ俳句に關する評論も中々健氣な處があるね

▲社友奥原碧雲君竹島視察の一行に加はつて嘸面白い觀察も多かつたと思ふ處柄嶄新な韻文も出來たらう

▲社友增野翅白君は學年末休業中某詩人を訪ふた儘かに一週間の旅行に過ぎなかつたが隨分興味のある事だ

▲和歌の研究もいゝが少しは長詩の方にも心を寄せたら妙だ發表はせんでも作歌の上に裨益する所が多い

銀鈴定價表

定價		郵稅
一冊	金五錢	金五厘
六冊	金參拾錢	―
十二冊	金五拾五錢	―

廣告料
一行五號活字二十四字詰貳拾錢
半頁　貳圓
一頁　參圓
郵券代用一割增

▲銀鈴清規は本誌前號に在り▼

明治三十九年四月二十日印刷
同　年四月廿五日發行

島根縣邑智郡田所村大字下田所七百廿二番地
編輯兼發行人　河野岩雄
島根縣飯石郡赤名村大字赤名八百三番地
印刷人　木村柳三郎
同縣同郡同村大字同八百廿一番地
印刷所　赤名活版所
島根縣邑智郡田所村
發行所　銀鈴社
取次所　安達共榮堂
同　古井圭山房
同　山本芙蓉堂